

就学前保育・教育施設へのインターンシップの効果 と課題 : 大学1年生のインターンシップの場合

著者	下里 里枝
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	10
ページ	29-39
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000493/

就学前保育・教育施設へのインターンシップの効果と課題 —大学1年生のインターンシップの場合—

A Study on the Effects and Problems of the Internship at Preschool Institutions: The Case of the Internship at University Freshman Level

下里 里枝*

Satoe SHIMOZATO

抄 録

保育士、幼稚園教諭の資格・免許取得には、保育実習、幼稚園教育実習は必須科目である。しかし、少子化時代にあって、実習に行くまで乳幼児と接したことがない学生がほとんどで、限られた期間での実習の学びは、やっと子どもに慣れて、学びが深まる前に終了してしまうことが多いのではないかと筆者は感じている。

そこで、本研究において保育者を目指す学生の実践的能力を磨くための科目「インターンシップⅠ」において、高校を卒業して間のない1年生にとって、保育の専門科目を学習せずに現場を体験するこの科目での学生の学びや気づきが、2年生での保育実習に臨む自覚や期待につながっていることがわかった。

I はじめに

文部科学省の「平成26年度大学等におけるインターンシップ実施状況について」によると、「インターンシップ」とは、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うことと」している。その調査によると、2014年度に「インターンシップ」を単位認定して実施している大学は566校で、昨年度542校と比較して24校増加した。また、単位認定を行わない大学を合わせると、740校(95.4%)が、インターンシップを実施していると報告している。この調査の結果を受けて、文部科学省は、インターンシップを学生が将来設計を考える機会として一層の推進・普及を提案している。¹⁾

保育現場へのインターンシップについては、先行研究として成田・森田(2009)がある。この研究によるとインターンシップの成果として、1つは学生の理論と実践とを結びつける機会となり、学生の学びの深まりがある。2つは、学生が子どもとの関わりの場面を通して自分の保育観を持とうとする姿勢の育成になっている。と考察している。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

溝口（2010）は、インターンシップが単位認定していない大学のため、学生が空き時間を利用して隣接の付属幼稚園への「保育参加」という形式の活動内容の研究であった。「保育参加」にあたって、事前に観察の視点を持って参加したことで観る目が養われたことと、立地を活かして継続的な「保育参加」ができ、教師に指摘されたことを改善、修正し、繰り返しのぞむことのできたことが大きな成果であったと述べている。

さて、関西国際大学は、2008年度より、「教育保育インターンシップⅠ、Ⅱ、Ⅲ」をそれぞれ単位認定の科目として位置づけ開講している。本稿では、1年生の「教育保育インターンシップⅠ」の実施状況をもとに、幼稚園教員養成課程、保育士養成課程におけるインターンシップの意義について考察する。

Ⅱ 関西国際大学における「教育保育インターンシップⅠ」の概要

まず、関西国際大学「インターンシップⅠ」の概要について紹介する。

1. 目的

「インターンシップⅠⅡⅢ」の目標は、保育者をめざす学生が、学内での科目と関連させて、就学前施設で職場体験を行うことにより、保育者として必要な実践的能力を高めるとともに、自らの社会性や人間性を培うことを目的としている。

「インターンシップⅠ」は、1年生であるので、まだ保育の専門的な講義を受けていないが、2年生の保育実習に行く前に、保育現場で職業体験を行い、社会人としてのマナー、法令遵守、守秘義務などについての理解を深める。また、保育者や子どもと触れ合い、保育現場に慣れ保育者の仕事の内容を知り、大学生活の課題や自分の適正を考える機会とする。などを目的とする科目であり、保育実習の効果をあげるためにも大きな教育的効果が期待される。

2. 内容

大学より振り分けられた保育所や幼稚園に行き、乳幼児の保育補助、保育教材の等の準備手伝い、保育室整理の手伝い、園内環境美化手伝い、幼児の個別支援の補助、園外散歩等の引率補助等を行う。

実施時期は、学生が夏期休業中の8月・9月。

3. 方法

学内講義（10回）・学外体験3日以上となっている。

4. 学年

1年次

5. 単位と単位認定

2単位で、選択必修科目として実施する。

インターンシップへの参加状況や終了後の活動記録、事前事後のレポートなどにより科目担当者が評価する。

Ⅲ 活動記録の分析

2016年度は、当大学の系列である T 小規模保育園（参加学生 12 人）と S 保育園（参加学生 48 人）、M 幼稚園（参加学生 12 人）の 3 か所に、計 72 人が「インターンシップ I」を履修した。活動記録は、インターンシップ終了後に担当教員に提出させている。学生の活動記録を分析することで、学生にどんな学びがあったのかを考えてみたい。

【小規模保育園の場合】

A さんの活動記録より

まず第 1 日目の記録では、「服の着脱などの行動は、保育者が言葉をかけながらしている。室内で遊ぶときには常に周りが見渡せるように、座る位置に気を付けなければならない。廊下で遊ぶときは、危ない所、中間地点、端などに先生がおり、どこに誰がいるかを確認している。」という記述から、0 歳児～2 歳児までの子どものいる保育園での細やかな保育者の配慮内容に注目している。3 日目では、「外遊びの時に、虫が苦手な私は虫に近づこうとしなかったが、先生から励まされて、ダンゴ虫を触った。全身に鳥肌が立ち、気持ちが悪くなったが、先生になるための必要な一歩は踏み出せた。」という記述があった。虫の苦手な筆者にも経験がある。しかし、保育の場ではクリアしておきたいと思い、ザリガニやカエルが触れるようになり、子どもの前では触り方を説明できるまでになった。A さんの思いに共感し、前向きに意欲的に取り組む姿に心から拍手を送りたい。

「保育士さんに、保育士としてつらいことは何かと聞いたところ、怪我を 1 つでもしてしまい傷をつけて親に返すことが 1 番辛いと言っていて驚いた。私は親との関係が大変なものだと考えていたので、その答えには意表を突かれた。また、怪我をせず、そのままの状態に返すのにプラス、何か 1 つでも出来ることが増えて保護者に返すことがうれしいと知り、すごくためになる話が聞けた。」大学での講義よりも、現場の保育者の信念のような思いはとても胸を打ったことと思う。と同時に保育者の大切な役割を知ることができたであろう。

B さんの活動記録より

「0 歳児クラスに入った。0 歳児はまだ何も話すことができないので感情を読み取るのが難しかった。」と記録に書くと、担当の保育者から「何かおしゃべりしています。」とコメントが返してあった。学生にとって今まで赤ちゃんと触れることはなかった。どうやって関わったらいいのか戸惑った様子がうかがえる。しかし、2 日目の記録には「初めての時よりは子ども達が寄ってきてくれたような気がした。」また、「散歩の時、ベビーカーに乗って風を感じながら楽しそうにしている可愛かった。」と書いていた。子どもと関わるのが楽しいという実感を味わったようだ。「バッタを見て怖がる子どもがほとんどで、中にはバッタを手に取り口に入れようとしている子もいてびっくりした。また、公園にあった花を持つと、その花を口に

入れようとしていた子もちらほらいて、0歳児は何でも口に入れようとしてしまう、という先生の言葉を聞き、外に連れて行った時は、特に子どもの動きをしっかりとみておかななくてはならないということがよくわかった。」と、0歳児の発達の姿や保育者の配慮について学んでいることがわかる。

Cさんの活動記録より

「1歳児クラスを体験した。お手拭きを水に浸してしばっていただけなのだが、その時にアレルギー体質の子どもの説明を先生から受け、お手拭きも除去の子どもを分ける配慮がみられた。」

「昼食の時にも、除去の子どもの管理がなされていた。今日は食べ物が子どもによって違ったり、座る場所が違ったり、除去の子どもの扱いの難しさを改めて感じた。」と書いている。最近増えてきている食物アレルギーのある子どもの対応について実際に具体的に知ることができたようだ。食物アレルギー児への対応については、Cさん以外の学生も数人記述しており印象深かったようだ。

【S 保育園の場合】

この保育園では、学生は毎日違う年齢を担当させていただいた。

Dさんの活動記録より

「3歳児クラスに入った。1日目に入った1歳児に比べてある程度自分の身の回りのことは自分でできていたので、補助するところはほとんどなかった。」「園庭遊びで、物を貸してほしい時、「貸して」と言って借りる場面を見て、譲るということを理解しているのだと感じた。」「歌を歌う時、ある程度言葉を話せる3歳児の子ども達は大きな声で楽しそうに歌っていた。」「給食の時、お箸をきちんと持てる子がいたり、グーの形で持っている子もいた。まだ個人差があると感じた。」1歳児と3歳児を比べて、年齢による発達の違いと、同じ年齢でも個人差があることを学んでいた。

Eさんの活動記録より

「4歳児クラスに入った。4歳児は人見知りすることはなかった。外遊びも走ったりするような少し集団で遊ぶようなものが多くなる。」「プールの準備はほぼ自分達でできるようになる。」

「物の取り合いでけんかをする。言葉はしっかりしゃべり伝えたいことは口で伝えている。」などと4歳児の特徴をつかんでいる。Eさんは1日目は3歳児、3日目は0歳児クラスに入ったので年齢により子どもの姿の違いがあることに気づいたようだ。

Fさんの活動記録より

「同じ大学の先輩が保育実習をしていた。その先輩が部分実習で、ギターを片手に「おもちゃ

のちゃちゃちゃ」や「とんぼのめがね」「ありのまま」などを弾いて、子どもと一緒に大きな声で歌っていて感動した。」Fさんは保育実習生の部分実習を見ることで、2年生の保育実習への期待やイメージを持って記述していることがわかる。

Gさんの活動記録より

「1日目は5歳児クラスに入った。最年長クラスというのもあり、自分のことはすべて自分でしていて感心した。」「2日目は1歳児クラスに入った。会話ができず伝えたいことが分からなくて戸惑った。このクラスは4人の食物アレルギー児がいてその子ども達への配慮（台拭きを別にしたり、テーブルを別にしたり、一人一人間違えて食べないようにすること）がとても勉強になった。」「3日目は2歳児クラスに入った。おもちゃの取り合いをしたとき、たたいたり、蹴ったりすることが増えてくるので、それが怪我にならないように気を付ける。2歳児はおむつをしている子とパンツをはいている子がいる。それをきちんと把握しておかないといけない。」「年齢に関係なく、自由遊びの時にはクラス全体が見える位置に座り、子ども達と遊びながら周りにも目を配る。」Gさんは、子どもがよく見える位置にいないといけないという保育者の大切な配慮を学んだようだ。

【M幼稚園の場合】

系列の幼稚園が、実習期間と重なり、受け入れができないということで、大学系列ではない今まで行ったことのないM幼稚園に依頼をして受け入れてもらった。

Hさんの活動記録より

「1日目は子どもとどのように関わっていいのかわからずただ立っているだけになった。担任の先生に、子どもともっと触れ合ってあげてと言われた。」「2日目なので、色々な子どもと関わられた。昨日全然話せなかった子と今日は関わろうと思い、控えめの性格の子にたくさん話しかけてみた。すると、たくさんの子子ども達が寄ってきてくれて、色々な話をする事ができた。9月から転園してきた子もたくさん話しかけると、少しずつ話してくれるようになり、最後はたくさん話してくれた。たくさん話しかけてみると、人見知りの子も話しやすくなるのかなって学習した。」Hさんは、1日目の反省を踏まえ、2日目は自分なりに目的を持って、積極的に子どもと関わろうとしている。その努力が子どもと楽しく触れ合う体験につながったようだ。このように、子どもと関わるということの実感をつかむことは、現場でしか学べない。

Iさんの活動記録より

Iさんは5歳児クラスに入った。いろんな場面で5歳児の姿にとっても感動をした記録であった。「けんかが起きた時、先生が加わって仲直りさせるのではなく、自分たちで話し合っ解決させていることがすごいと思った。5歳児はたくさん先生に質問をすることがわかった。な

んで〇〇なのとよく聞いていた。」「おやつ時間に一人の子どもが牛乳をこぼしてしまった時、周りの子にもかかわってしまったけど、くさいや、最悪とかを言わずにこぼしてしまった子に「大丈夫？」と声をかけ、拭くのを手伝う姿に感動した。このクラスの優しさが感じられた。」

5歳児になると、心情面の育ちが著しく発達する。大人がびっくりするような思いやりの言葉も聞くことがある。Iさんはそんな5歳児の発達の姿に触れることができたようだ。

Jさんの活動記録より

「4歳児クラスに入った。先生による本の読み聞かせは、本を持つ手の位置、読む速さ、間を開けること、声の大きさが特に大切だと学んだ。子どもの様子を見ることは当然、常に子ども目線で考えなければいけないと感じた。」「帰りの会では、連絡帳の返却中に身だしなみのチェックをし、少しの空き時間も無駄にならないよう工夫していることに気づいた。」「昼食時、先生も子どもたちの輪に入るときは座る位置に注意しないといけないことを学んだ。クラス全体を見ることができる位置に座らなければならない。」

Jさんは、絵本の読み聞かせの場面や、保育者が常に子どもと向き合い時間を有効に使って保育をしている姿から、実際の保育者の仕事を間のあたりにできたことで、多くの気づきができたようだ。

IV 受け入れ先の評価

インターンシップの後に、実習園と振り返りの場を持った。実習園から指摘されたことは、保育実習ではないので、どこまで指導をしたらいいのかわからない。現場もこわごわ受けている。保育実習と同じことを求めるのか。学生によって、取り組みの様子が違う。意欲的な学生ばかりでなく、何をしにきているのかわからない様子の学生もいた。3日間表情があまり変わらない学生と、日々変化する学生もいたと報告された。来年の保育実習に期待を持ってほしいために、あまり厳しく指導できなかったと感じているとのこと。事前に大学と共通理解をしておきたいということである。特に実施期間が保育実習との重なりがある時は、十分な指導ができていないとも言われた。

また、一部の学生ではあるが、身だしなみの指導ができていないのではないかと指摘された。インターンシップ開始までに大学で指導はしたが、徹底できていなかったようだ。アクセサリをつけている、保育前に服装を着替えていない、欠席や遅刻の連絡をしてこない、体調不良を言わない、爪を切っていない・・・等。保育実習では事前指導で繰り返し講義をしているが、「1年生のインターンシップⅠ」は学生に自覚を持たすことができていなかったのかもしれない。

これらの課題を改善するために、「インターンシップⅠ」の目的を、事前授業において再確認しておく必要がある。また、インターンシップ園での実習のあり方について、事前の打ち合

わせをしておくことが大切であることを知ることができた。

V 活動後のレポートからの分析

インターンシップ後、学生に「インターンシップで学んだことと保育実習に向けての課題」というテーマでレポートを提出させた。72人のレポートを分析した結果、学生の気づきや学びを得た場面や、子どもの姿を主に5つの観点から捉えることができた。

1つ目は、保育者から学んだことである。

保育の場面での気づきで、「手作り玩具がたくさんあった。子どもの発達にあわせて作られていた。子どもの指や手の動きを考え、誤飲しないような大きさの玩具の工夫を見ることができた。」「年齢に合った指導をしていた。」「子どものしぐさや言葉から何を伝えようとしているのかを理解しようとしていた。」「子どもを楽しませるには子どもと同じように保育者も楽しむことが大切だ。」「玩具の取り合いの場面では冷静にお互いの話を聞いて、双方が納得するように解決していた。」「子ども達のけんかはどうやって接したらいいのかわからず苦労した。その時の先生の指導の仕方がすぐまねできるものではない。先生と子ども達の信頼関係があるからこそだと感じた。」「3歳児が運動会間近なので、ダンスの練習をしていた。つまづいている子にはゆっくりとわかるまで教えていた。諦めずに子どもと向き合って教えることが大切だ。」「子どもに対する接し方や先生たちの責任感の強さを感じた。」

給食の時間では「ただ食べさせるだけでなく、子ども一人一人の健康管理や発達段階をしっかり把握して、その子に合った給食やおやつを食べさせていた。」

保護者との関わりについて「しっかりと保護者とのコミュニケーションを取っていた。」「その日の子ども一人一人の体調や保護者からの連絡事項をすべて把握していた。大変そうであるが、やりがいのある仕事だと感じた。」保育者間のミーティングの様子を見て「朝、先生同士のミーティングタイムがあった。素早く正確に伝えているのはすごいと思った。」

保育者の専門性について、実際に見て学ぶことができたようだ。

2つ目は、子どもの発達についての気づきである。

「年齢に応じた接し方が必要だが個人差がある。」「子どもは思った以上に自分のことができていた。」「3歳から5歳は自分でできることはさせて、過剰なサポートをし過ぎないことを学んだ。」「どんな小さなことも成長途中の子どもにとっては大きな一歩なので、ほめることが自信につながると感じた。」「5歳児は他の歳児とは違い、しっかりしている。」「子どもの1年間の成長は大きい。発達に興味を持った。」「自分でやりたいという自立心を育てるための援助の大切さを学んだ。」「子どもが手で食べていても、注意しなくてもいいと言われた。自分で食べるという行為自体が大切であること、手を使って食べることで指や手の発達にもつながること

を知った。でもどの年齢にも当てはまるわけではないので、年齢の違いを理解して保育者の対応を学びたい。」

どの学生も、子どもの姿に触れており子どもの発達を学ぶことへの動機付けになっている。

3つ目は、保育現場での自分自身についてである。

「一人の子どもの世話に集中し過ぎて周りが見えなかった。」「子どもと目線を合わせる事が重要。私は身長が高いので子どもに威圧感を与えないように接することが大切だと思った。」

「子ども同士のけんかの対応が難しかった。4歳になると自我や自己主張が芽生えているのでよい判断ができなかった。」「0・1歳児クラスではどのようにかわっていいのかわからなかった。」「緊張して自分から積極的に動けなかった。」「毎月部屋に飾るものを作るそうで、私は苦手だと言ったら、先生が本を見ながら作ったら何とかなると言われてほっとした。」「積極的に寄ってきてくれる子どもとは仲良くなれたが、あまり寄ってきてくれない子どもとは全然遊べなかった。」

このように、自分が保育現場でどんな動きをしていいのか戸惑った学生が多くいた。これは、回数を重ねると慣れることもあるが、子どもの発達について知識が重要であることも気づいたことだろう。

4つ目は、インターンシップを経験して感じたことである。

「食物アレルギー児への対応の難しさ。ミスが子どもの命に影響する。命を預かる大変さを感じた。」「想像していた仕事と実際の仕事の内容にギャップがあった。体力を使うハードな仕事が多いことがわかった。」「保育士は子どもと接している時だけが仕事ではない。子どもが伸び伸び快適に過ごせるように常に考える仕事だと学んだ。子どもが午睡をしている時も連絡帳のチェックやトイレの掃除などして休む暇がほとんどないと感じた。」「インターンシップに行くまでは、保育者は子どもの身の回りのお世話をするという保護者的立場であるのだと思っていたが、子ども一人一人の性格を理解し、保育している時間内で子どもの将来のための社会性を学ばせるという教育者でもあるのだということがわかった。」「保育者という仕事が自分に本当に向いているのかを見つめ直すきっかけになった。」「3日間ではどのように子どもとかわったらいいいのかあまり身につかなかった。しかし、先生方の行動を見て、子どもと目線を合わすことや、子どもの体調を知ること、子どもとの信頼関係を築くことが大切だと学んだ。」

「保育所の1日の流れを知った。」このようにまず保育現場を知ること大切である。

「子どもと関わる楽しさを学んだので、子どもと関わる仕事がしたいと思った。」「インターンシップで出会った素敵な保育者のようになりたい。」「やっぱり幼稚園の先生になりたい。」

学生のこのような思いは、インターンシップに行ったからこそ感じる事ができたのではない。

5 つ目は、保育実習に向けての自分の課題である。

まず、技術的なことは、「一人一人観察し、子どもの感情や表情をうまく読み取れるようになりたい。」「子どもの目線になって、子どもを理解できるようになりたい。」「ピアノの技術を高めておく。」「全体を観察しながら臨機応変に対応し、ハードな仕事に少しでも慣れるよう努力したい。」「絵本の読み聞かせを練習しておく。」「手遊びや歌の引き出しを増やす。」などをあげている。

次に子どもとの関わりの場面では、「子どもとの関わり方を学んでおきたい。」「子ども同士がけんかをした場合、どのように対応したよいかを学んでおく。」「子どもの発達の仕草や表情で子どもの理解ができるようになりたい。」「子どもが興味を示すものへの知識や経験不足がわかったのはよかった。自分の課題である。」「乳児の勉強をしておきたい。」など、学生が技術力をつけることと、子ども理解のために知識を学び、実践力をつけ、実習に臨みたいという意欲を感じた。

自分自身の課題として、「保育以外の洗濯や掃除などをさせてもらった。子どもと関りのないことだが、必要な仕事である。これらの仕事を素早く片付けることで、他の仕事にもとりかかることができる。自分で洗濯や掃除をする習慣をつけ、実習までに先生に質問しないで自分のできるようにしておきたい。」「インターンシップでは指示されて動くことが多かった。実習では自分から積極的に動けるようになりたい。」「疲労を感じたので体力をつけておきたい。」「ボランティアなどで現場に行く機会を増やしたい。」

このようにわずか3日間ではあるが、学生は様々な学びをしていることが読み取れる。保育場面で、子どものこと、保育者のこと、自分の動きなどを新鮮な気持ちで受け止めている。学生にとって心が動く瞬間が、感性を豊かにすることにもなる。そのことが保育者には求められる重要な資質である。

VI 効果と課題

効果の第1は学生の保育実習への期待の高まりである。2年生以降のより専門的な学びへのモチベーションの高まりがある。保育現場の経験を基に、保育の専門科目を学び、さらに保育実習を体験することで、相互に補完し合ってより専門的な実践能力の構築につながると考えられる。

第2は将来の職業として、あこがれるモデルとなる保育者に会った学生もいた。これは貴重な体験になったと考えられる。

課題は、受け入れ先の確保である。系列の保育所には、7人～8人の学生が3日間ずつ入れ替わり、落ち着かない環境ではなかったかと推測する。筆者が現場にいるときは、インターンシップは受け入れなかった。実習生がいると、子どもは舞い上がり、クラス運営の妨げになる

こともある。保育現場は次々と様々な大学の実習生を受け入れており、それ以外のインターン

シップは非義務的な行為と感じていた。保育現場にとってインターンシップは、ある意味お互いの「理解」と「厚意」があつてこそ実施できるのではないかと思う。大学系列の幼稚園、保育所、などに協力を得て実施しているが、学生を送り出す時期が、保育実習とも重なり、受け入れが難しいのも事実である。

実習ではないので「幼稚園がいい」「保育所がいい」と自分の希望を言う学生には、どこでも学びはあることを伝えた。また、自主的にボランティアで保育現場に行くことも勧めた。

今後は、教員自身がインターンシップでの効果をより深めるための、事前指導のあり方について、学生のレポートを読みながらいくつかのヒントを得た。Aさんが保育者に質問をしてたことになる話が聞けたと書いていた。保育者への質問項目を考えておくことも学びにつながることを感じた。また、観察が中心になるが、自分なりの目標を持って臨むことも振り返りに活かせるだろう。学生が、今の自分とこれからの自分に具体的なイメージや課題の持てるような授業内容を工夫していきたい。

<引用文献>

- 1) 「平成 26 年度大学等におけるインターンシップ実施状況について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/internship/1368427.htm

<参考文献>

渡辺三枝子・久保田慶一編『はじめてのインターンシップ』（株）アルテス（2011）

成田信子・森田健『『教育保育インターンシップⅡ』の現状と課題―保育所・幼稚園の場合―』

『関西国際大学研究紀要』第 10 号（2009）

溝口綾子「こども教育専攻学生による保育参加の意義～幼児理解と保育者志向の変容～」

『帝京短期大学紀要』16 号（2010）

Students must take subjects of preschool internship to get teacher license at kindergarten and nursery center. However, many students do not have an opportunity to come in touch with infants until they practice at these institutions. The author considers that under the limited internship period, internship come to an end before students become familiar with infants and deepen their learning.

Then, the freshmen who take the subject of "internship I", which aims to improve the practical ability, are set to be subject in this research.

Obtained results are as follows; 1) The freshmen acquired some awareness and expectation through "internship I" without learning special nursing subject. 2) These awareness and expectation are linked with the consciousness and expectation in "nursing internship" at the sophomore level.